

たら、その手から武器を取り上げるために必要なことは、テロや暴力を行う人々を「戦闘員」「テロリスト」などと呼び、自分とは関係の無い全く異質な人だとするのではなく、自分と異ならない一人の「人」として対応していくことが大事だと考えることができます。

### 終戦に導いた「広告の力」 一人の「あなた」に呼びかける

2017年8月15日、約50年にも及ぶ南米コロンビアの内戦に終止符が打たれました。この内戦での死者・行方不明者は約25万人、誘拐によって多くの子どもたちもゲリラ兵となっていました。そうした内戦が終結したのは、多くの人々の多大な尽力によってもたらされたのですが、その一つに「広告の力」がありました。クリスマスのたびに「ジャングルにクリスマスが来るのなら、きみだって家に帰れるはずだ」と記した幕を張る。ゲリラ兵の幼い頃の写真を探し出し、母親のメッセージと共にジャングルの川に流す。またゲリラ兵の幼い頃の写真とともに「ゲリラになる前、あなたは私の子でした」というメッセージが入ったポスターを至るところに配布する。こうした活動の結果、約1万8000人のゲリラ兵が投降したというのです。

この活動を主導した広告クリエイターは、次のように言っています。

「兵士としてではなく人間として一人ひとりに呼びかけるべきだ」

不条理な行為によって命を落とされた方々を悼み、悲しむことは大切なことです。その時、同時に、「怒りに震えている人」「武器や暴力に訴えるしか手段を持



たない人」の悲しみや苦しみにも目を向ける必要があるのではないのでしょうか。

「戦闘員」「テロリスト」ではなく、一人の「あなた」に呼びかけたからこそ、その「呼びかけ」は相手に届き、応える人がいたのです。

世界中で、武器を手に取り、他人の命を奪ってしまう人々がいます。自分自身の命をなげうつことで主張を行おうとする人々がいます。そうした人々は、私と何がどこまで違っているのでしょうか。どのような人であっても、自己中心的な心によって苦しみを自ら生み出し続けていることに変わりはないはずです。

『歎異抄』に「さるべき業縁のもよほさは、いかなるふるまひもすべし」（しかるべき縁がはたらけば、どのような行いもするものである）といわれるように、状況次第によってはどのようなことをしてしまうかわからないのが私たちです。凡夫であることに、私も、あなたも、<sup>ほんぶ</sup>「テロリスト」も、変わりはないはずです。

### 悲しみ、苦しみの声を聞く 念仏者として一歩踏み出す

しかし同時に、「縁に触れたら何をするかわからない身」であることに気付いている人と、そうでない人とは、自ずと行動は違ってきます。「苦渋の選択」をせねばならなくなるような「縁」とならないよう、常に敏感にアンテナを張り、適切に対応していくことは、念仏者として大切なことです。

それとともに念仏者として、おだやかな顔とやさしい言葉で「誰かの悲しみの声・苦しみの声」を聞こうとすることから、問題解決に向けた活動を始めることができるのではないのでしょうか。南米コロンビアの内戦終結が示すように、踏み出す一歩は少しの歩幅でもいいのです。誰もがそれぞれに少し踏み出せば、それが大きな歩みへと続いていきます。